

平成 22 年 6 月 19 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730415

研究課題名（和文） 高齢者のメタ記憶と自己高揚的認知に関する研究

研究課題名（英文） The Research toward metamemory of elderly and self-enhancement recognition

研究代表者

河野 理恵（KAWANO RIE）

目白大学・人間学部・准教授

研究者番号：19730415

研究成果の概要：

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	29,000,000	600,000	3,500,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：生涯発達

1. 研究開始当初の背景

自己の記憶能力に対する評価、あるいは自己の記憶に関する知識など、自己の記憶に関する認知は「メタ記憶」と呼ばれている。近年の世界的な高齢化に伴い、老年期の教育・学習に焦点があてられるようになると、老年期の学習の仕方、自己の記憶能力の評価などが重視され、高齢者のメタ記憶を明らかにすることが急務である。

これまでの高齢者を対象としたメタ記憶研究において、以下のことが明らかにされてきた。ほとんどの高齢者は自己の記憶能力が衰退しないように、日々できるだけ頭を使うことを心がけている。高齢者のほとんどが 30 代の頃よりも自己の記憶能力の衰えを感じていたものの、1 年前と比較した場合に

は、自己の記憶能力の衰えを感じている者は少なかった。記憶テストの成績に関わらず、同じ年の他人と比べた自己の記憶能力の評価は、ほとんどの高齢者が「自分の方が優れている」と判断していた。従来、日本人は謙譲の美德を重視し、自己卑下的評価をすることが多いと考えられる。しかしながら、得られた高齢者のメタ記憶の結果は、これまでの一般的な日本人の評価傾向と異なる自己高揚的認知がみられており、このことは非常に興味深い。

2. 研究の目的

本研究では、高齢者のメタ記憶と自己高揚的認知に焦点をあて、以下の 3 点を明らかにすることを目的とする。

1) 高齢者におけるメタ記憶に対する自己高

揚的認知の理解とその要因の解明

2) 高齢者におけるメタ記憶と精神的健康、及びその他の領域での評価

3) 高齢者におけるメタ記憶の自己高揚的認知の国際比較

3. 研究の方法

研究目的 1) については、高齢者 113 名(男性 46 名、女性 67 名) に対して質問紙調査を実施した。

研究目的 2) については、高齢者 103 名(男性 41 名、女性 62 名) に対して質問紙調査を実施した。

研究目的 3) については、カナダ人の高齢者 33 名(男性 12 名、女性 21 名) に対して聞き取りによる質問紙調査を実施した。

どの研究においても、調査は無記名であり、その結果は記号化されて処理されるため、個人のプライバシーを侵害する恐れはないことを十分に理解してもらった上で、調査協力を得た。

4. 研究成果

研究目的 1) 高齢者におけるメタ記憶に対する自己高揚的認知の理解とその要因の解明

高齢者では、自己の記憶に対する評価において自己高揚的認知がどのような場合に見られるのかを明らかにした上で、その要因を検討することを目的として質問紙調査を行った。対象は高齢者 113 名(男性 46 名、女性 67 名) であった。質問紙では、高齢者の記憶の衰え感を明らかにするために、過去と比較した場合(「30 歳代の若い頃と比べて、ご自身の記憶力は衰えたと思いますか」と、同じ年の人と比較した場合(「同じ年の人と比べて、ご自身の記憶力は衰えていると思いますか」) について回答を求めた。その後、その回答を行った具体的な理由、記憶の衰えを感じ始めた時期などの回答を自由記述で求めた。その結果、自己の記憶に対する評価であるメタ記憶において、自分が 30 歳代であった若い頃と比較した場合、現在、自分の記憶力の衰えを感じている者が有意に多かった($\chi^2(1)=56.63, P<.01$)。その理由として「本や映画、テレビの番組の題名、店の名前が思い出せない」「人の名前がのどまででかかっているのに出てこない」という事例が数多くあげられた。30 年から 40 年という年月の間、様々な記憶に関する失敗経験を積み重ねることによって、加齢に伴う記憶力の衰えを感じてきたと推察される。また、記憶の衰えを感じ始めた時期は、平均 64.1 歳であった。その一方、同じ年の人と比べて、自分の記憶力が劣っていると感じている者はほとんどいなかった($\chi^2(1)=77.44, P<.01$)。つまり、高齢者は「同じ年の他者」と比較した場合には、記憶において自己高揚的認知が見られることが明らかになった。Figure 1 に結果を示す。このように自己の記憶に対して自己高揚

的認知を行なっている理由として、「同じ年の人は認知症になっている人もいるが、自分は違う」という病気に関する意見が散見された。とりわけ、「自分は認知症になっていないから」という意見が多く、記憶を損傷する病気である認知症に対する意識が加齢とともに高まっていることがうかがえる。他方、「班長、役員をしているから」「ダンスをしているから」という積極的活動、「他人はどうしてそんなに忘れるのかと思う」「人よりも先に思い出せる」という記憶の直接比較、「友達がそう言うから」「みんなからしっかりしているとされるから」という日常での賞賛などをもとに「同じ年の他人よりは衰えていない」と自己を評価している様子も見受けられた。これらの結果から、高齢者が同じ年の人と比べて自己の記憶能力を高く評価する自己高揚的認知が見られる要因として、病気を基にする自己の判断と他者からの年齢を基準にした判断の双方が影響していると考えられる。

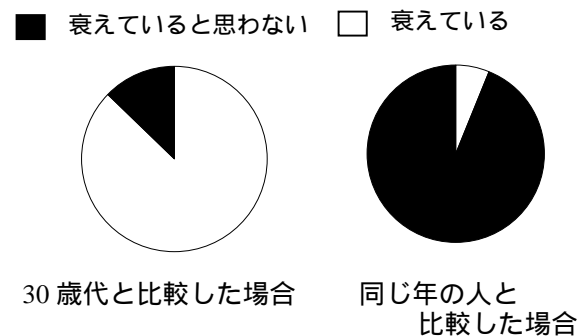


Figure 1 記憶の衰え感についての評価

研究目的 2) 高齢者におけるメタ記憶と主観的幸福感、及びその他の領域での評価

自己の記憶に対する評価であるメタ記憶において、研究目的 1) で見られたような特徴が記憶以外の領域でも見られるのかを明らかにするために質問紙調査を行った。対象者は、自己の記憶に対する評価であるメタ記憶において、自分の若い頃と比較した場合、現在の自己の記憶力の衰えを感じているが、同じ年の他者と比較した場合には自己の記憶力は衰えていないという、いわゆる自己高揚的認知が見られた高齢者 103 名(男性 41 名、女性 62 名) であった。記憶以外の領域として、体力、動作、健康、病気などの側面をとりあげ、主観的健康感を検討した。その結果、体力、動作、健康、病気においても、メタ記憶と同様に、過去と比較した場合には自己高揚的認知は見られなかったものの、同じ年の人と比較した場合には自己高揚的認知が見られた。すなわち、メタ記憶で見られた自己高揚的認知の特徴は、その他の領域においても見られることが明らかになった。こ

これらの結果から、記憶や主観的健康感における高齢者の抱く複雑な自己評価が明確になったと言えるであろう。Table1 に結果を示す。

Table1 記憶の衰え感と主観的健康感の回答人数

	30歳代と比較		同じ年の人と比較	
	思う	思わない	思う	思わない
記憶は衰えたと思いますか	89	13	6	94
体力は衰えたと思いますか	98	5	31	71
動作が鈍くなったと思いますか	96	7	25	77
疲れやすくなったと思いますか	93	9	30	71
健康でなくなったと思いますか	64	39	26	77
病気が多くなったと思いますか	62	41	19	83

次に、このような様々な領域で見受けられる自己高揚的認知は、主観的幸福感と関係があるのかを面接調査により検討した。対象は高齢者5名(男性2名,女性3名)であった。その結果、「同じ年の人では病気(認知症)になっている人もいるが、私は違うから幸せだ」「年を取っても他の人よりも元気でいられることがありがたい」など、周り的高齢者と比較をして、自分の状況を肯定的に、かつ良いものだと捉えており、自分は幸せであると考えていることが明らかになった。すなわち、様々な領域における自己高揚的認知は、精神的健康に効果的であることが示唆された。

研究目的 3) 高齢者におけるメタ記憶の自己高揚的認知の国際比較

これまでの研究で見られてきた、高齢者のメタ記憶における自己高揚的認知が、日本以外の国の高齢者においても見られるのかどうかを検討することを行った。調査対象はカナダ人の高齢者33名(男性12名,女性21名)であり、質問紙調査を実施した。その結果、日本人の高齢者と同様に、「過去と比較した場合」においては、自己の記憶に対して、衰えたと評価していたものの、「同じ年の他者と比較した場合」においては自己高揚的認知が見られた。この結果から、日本のみならずカナダの高齢者にも複雑な自己評価が存在することが示唆された。しかしながら、メタ記憶に対する現象として同様のことが顕著であったのだが、その理由は少し異なるようであった。すなわち、カナダの高齢者において、同じ年の他者と比較した場合に自分の記憶が衰えていないと評価する理由として、「毎日、楽しく過ごしているから」「私は活動的だから」など自分の生活のポジティブな側面をピックアップしていることが見受けられた。これは、病気のことを筆頭にあげる日本の高齢者の理由とはやや異なる傾向であったと言えるだろう。

このように、高齢者のメタ記憶を検討する研究は、高齢者の抱く複雑な心理状態を把握することになると考える。そのことによって、

我々が高齢者の尊厳や人権を尊重することが可能になり、個性豊かな老年期の生活や活動、学習などを支援する際の一助となりえるのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

河野理恵 高齢者における記憶の衰え感の検討(2) - 主観的健康感と記憶活動の認知の観点から - 日本心理学会第71回大会, 2007

河野理恵 大学生の敬老意識と敬老行動に関する研究 日本心理学会第72回大会, 2008

河野理恵 家族介護者の人権意識に関する研究 日本健康心理学会第22回大会, 2009

〔図書〕(計1件)

河野理恵 エピソードでつかむ老年心理学 ミネルヴァ書房 2010

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野 理恵 (KAWANO RIE)

研究者番号: 19730415

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：